

(別紙2)

論文審査の結果の要旨

氏名：高野太輔 (こうの たいすけ)

論文「アラブ系譜体系の構造と成立過程」は、これまで漠然として把握されてきた初期イスラーム時代のアラブ血縁集団の性格を、アラビア語史料にもとづいて厳密にとらえなおすことを第1の課題としている。筆者は、アッバース朝(750-936年)時代に発達したアラブの系譜学書を綿密に解きほぐし、基本的にはフィクションの産物である系譜学書に記されている系譜体系の構造をさまざまな角度から分析することによって、それらの系譜体系が学者たちによって整理・統合されてきた過程を具体的に再構成することをめざす。この作業を通じて、アラブ系譜集団の本来の姿を可能な限り再現することが本論文の最終的な目標である。

第1章では、当時のアラブが保有していた系譜システムの原則を概説するとともに、南北アラブに含まれる主要な系譜集団の系譜と歴史を網羅的に紹介する。続く第2章ではアラブの系譜学が誕生・発展してきた過程を通時的に観察したうえで、彼らの用いた方法論の特徴について考察している。本論に相当する第3章～第5章では、アッバース朝時代のもっとも代表的な系譜学者であるヒシャーム・ブン・アルカルビーの『大系譜書』を主要な史料に用いて、以下のような結論が導かれる。すなわち、(1) 婚姻関係にみえる世代関係の矛盾から、系譜体系を確定するに当たっては、系譜学者による意図的な「作為」があったこと、(2) 系譜集団が分岐していく仕方には、南北アラブで「等位構造」と「階層構造」との明らかな相違があったこと、また(3) ある集団が他の集団に対して行う連続的な「母祖の供出」、つまり婚姻関係の取り結び方に注目すれば、現在に伝えられるような系譜体系が確定されてきた過程を、具体的に再現することが可能である。

これらは、同時代のアラビア語史料を綿密に分析して得られた貴重な結論であるが、「系譜集団」と「血縁集団」とをさらに明確に定義する必要があること、また史料収集をいちだんと徹底させることが求められることなど、今後研究を深めるべき余地は残されている。しかし大規模な血縁集団の内部では、小規模な下位集団を結ぶ明確な血縁関係は意識されていなかったが、これを体系化することによって擬制の血縁関係を確定したのは、アッバース朝時代の系譜学者であったとする結論は、内外の学界への貴重な貢献であり、博士(文学)論文として十分な評価に値する